

# ロシア文学から人生と平和を考える

## 『罪と罰』の舞台を訪ねて

サンクトペテルブルク

人間の行為の善悪について重い問いかけ

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」

「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

——主人公ラスコーリニコフの“殺人哲学”は不合理と不平等が消えていない現代社会でも共鳴する若者がいるかもしれません。



「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいな感じだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」(本文から)



## 『戦争と平和』の舞台を訪ねて

モスクワとヤースナヤポリャーナ

戦争現場の実態と歴史への無限の教訓

「やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れ果てた者や、ためらっている者の上に、小雨がしとしと降り始めた。『おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ・・・いい加減正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？』こう言っているかのようであった」



(本文から) 戦争、殺し合いの不条理、生死について解説をしています。日常の世界で人を一人殺せば犯罪です。でも戦争では大勢の敵(人間)を殺すほど英雄になる。トルストイは、文明というものが進めば進むほど、むしろ人間生活をゆがめ、魂の生活を損ねるものだという結論を抱くようになった。



## ロシア・ウクライナの戦争終結へまず生命の尊厳の哲理を

June bride in Russia (ロシアの6月の花嫁)

思いがけず遭遇した幸せなカップルたちの写真も多数ご紹介します



日本ペンクラブ会員

清水武

ホームページ：<http://donky.la.coccan.jp/>

## ロシア文学紀行 Power Point 原稿 2022.11.26

タイトル（以下、赤字はパワーポイントでスクリーンに映し出した写真または文字です）

皆さま、こんにちは！ ただいまご紹介にあずかりました清水武でございます。 昨年も 12 月にお呼びいただき「世界おもしろ文化比較」とのタイトルでお話しさせていただきました。本日はお忙しいなかロシア文学についての講演にご参加くださりましてありがとうございます。

ロシアのウクライナ侵攻を契機に、テレビには戦争の悲惨な状況が映りひどい政治の実態が伝わってきます。現在のロシアに対する反感を抱いていらっしゃる方も多いかと思えます。実は私もその一人でもあります。

なのに、なぜ今ロシアの文学を取り上げるのか。それは世界的文豪であるトルストイが、長編小説「戦争と平和」の中で戦争の本質と人間の生き方について深く語っているからです。そこで戦争というものの原点に戻り考えてみるヒントになれば、と思った次第です。

それに人間の生き方や社会について考える原点的な教材となっているドストエフスキの「罪と罰」も取り上げ、ロシアを代表する二人の作家の作品をご紹介することにしました次第です。

ちょうど 10 年ほど前に私は『世界文学紀行』の一環として今お話しした作品の舞台を訪ねて友人のカメラマンと一緒にロシアを訪れました。遅い新緑の萌える 6 月で、いわゆるジューンブライド（6 月の花嫁）に至る所で遭遇しました。

その模様をこれから 100 枚余りの写真と併せて紹介してまいります。難しいロシア文学をわかりやすく楽しく、と思っております。順序は旅の行程にあわせて最初に「罪と罰」その後「戦争と平和」を取り上げてまいります。

<ここからパソコンを操作する関係で座って話しをさせていただきます>

<地図>2 枚

2011 年の 6 月 14 日、成田を離陸したロシアのアエロフロート便は、途方もなく広いシベリアの上空を西に向かって飛んでいました。飛行機はちょうど 10 時間でモスクワ郊外のシェレメティョ国際空港に着陸。そこからすぐにサンクトペテルブルク行きの国内便に乗り換え、北に約 1 時間のフライトで最初の訪問地に到着しました。

なかなか沈まない窓の夕日 2 枚（以下、左端の数字は取材時の写真管理のもので原稿そのものには関係ありません）

0696 モスクワからのフライトの機中から見る空は、太陽が地平線上に残っていて周囲は金色に染まっていました。サンクトペテルブルクに着陸し空港を出たのは午後 11 時。ホテルに着いたのは 12 時過ぎでした。でも、外はまだ薄明るかった。“白夜”なのです。サンクトペテルブルクは北緯 59 度にあります。北半球の日照時間が最も長くなる夏至を前に、緯度の高い地域ではこうした現象が起きているのですね。

サンクトペテルブルク

0701 翌朝、ガイドの案内でさっそく街中に繰り出しました。街中に立つクトーゾフ将軍の像。ナポレオンの侵攻からロシアを救ったと言われる英雄であり、『戦争と平和』

の物語の中にも老將軍として出てきます。

0714 サンクトペテルブルクはかつてのロシアの首都であり、ピョートル大帝による建都以来ロシア最大の文化都市として発展してきました。そのため、特に帝政時代にはこの都市を舞台に多くの文化人が活動し、詩や小説などの題材としても扱われてきました。ソビエト連邦（ソ連）の時代には「レニングラード」と呼ばれていました。街中は美しい運河が網の目のように流れていて、“北のベニス”とも言われています。

ここでの主要な訪問場所は、ドストエフスキーの『罪と罰』の作品の舞台でした。

——「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

——こんな“殺人哲学”を心に秘めた貧乏学生の主人公ラスコーリニコフは、奪った金で世のために善行をしようと企て、強欲な金貸しのアリョーナ婆さんとその妹を斧で殺してしまいました。だがその直後から心の動揺は覆いがたく、発狂に近い状態になっていきます。追及する刑事と息詰まるようなやりとり。やがて売春婦ソーニャによって魂を救われ、最後には自首をしてシベリア流刑に服する——といった人間回復への強いヒューマニズムが描かれた小説です。

ここでストーリーの最初のさわりの部分を引用してみます：(いろいろな人が翻訳していますが、最もよく出来ていると言われる、元東京外国語大学の学長だった亀山郁夫氏の文からです)

——暑い7月初めの夕方、ラスコーリニコフは金貸しのアリョーナ婆さんの部屋に行く。殺人計画の最後の瀬踏（下調べ）みだった。

「距離はいくらもなかった。家の門から何歩かということも知っていた。ちょうど730歩だった」

「かれこれ11時近くだった。この時期にペテルブルグは、真っ暗な夜が訪れることはなかったが、それでも階段の上のほうはかなり暗かった」

「そこで、はっとわれに返った。<<あれの後だと！>>ラスコーリニコフは、ベンチから飛び上がりながら声をあげた。<<だが、はたしてあれをやるのか？ほんとうにやる気か？>>」

「<<ああ！>>と叫んだ。<<ほんとうに、ほんとうに斧をつかみ、あいつの頭をぶち割る気であるのか、あいつの頭蓋骨を粉みじんにしてやるつもりなのか・・・なまあったかい、べとつく血の海に足をすべらせながら、錠前をこわし、金品を盗み、ぶるぶる震えているのだろうか。体じゅう血まみれのまま、どこかに身を隠すのだろうか・・・斧を手にしたまま・・・ああ、ほんとうにその気なのか？>>そうつぶやきながら、木の葉のように震えていた」

ラスコーリニコフの心は動揺する。でも、彼の哲学に殉ずる友人の言葉に“あれの行為”への確信を深めていく。

「・・・もしかしたら、何十という家族を、貧困や、崩壊や、破滅や、墮落から救い出せるんだ。ばあさんのあの金があれば、それがぜんぶできる。・・・ひとつのちっぽけな犯

罪は、何千という立派な行いでもって償えないもんかね。たったひとつの命とひきかえに、何千という命を救えるんだぜ。ひとつの死と、百の命をとりかえっこするんだ。・・・あのばあさん、有害だもんな。・・・」

(そして、いよいよ実行の場面です)

「彼は一心に斧に飛びつき、腰掛の下の、二本の薪の間におさまった斧を引きずり出した」

「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいなきらびだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」

犯行後、ラスコリーニコフの心には思いもかけなかったさまざまな考えが浮かんできた。ともかく現場から逃げた。幸いに途中、誰にも顔を合わすことなく自宅のアパートにたどり着くことができた。

「窓際に走りよった。明るさは十分だった。すぐさま頭から足の先まで全身を見まわし、血の跡はないか、着ている服までくまなく調べ始めた」

(そして少しおいて)

「・・・どうしようもなく苦しみがつのってきた。<<なるほど、もうはじまっているのか、ほんとうにもう、罰がはじまっているってことか?・・・>>」

(と、自問が始まっていきます)

ここでスクリーンに戻りましょう。

私は登場人物のラスコリーニコフ、アリョーナ婆さん、売春婦ソーニャが住んでいたというアパート、それに作品中にときどき現れるセンナヤ広場、そして最後にドストエフスキー博物館を訪れました。

0726 **主人公ラスコリーニコフが住んでいたアパート**。彼は 4 階に住んでいたといいますが現在、部屋は解放されていない、とのことでした。

0728 建物の壁に刻まれていた標識です。約 200 年前に大洪水があったとき、サンクトペテルブルクの街も **ここまで水がついたという表示が記録**されていました。ちょうど 11 年前は日本でも 3 月に東日本に大地震と大津波があったばかりなので、なにか共通するような想いを抱いたものでした

0737 **街のあちこちにこうした花が美しく飾られています**

0738 **ソーニャが住んでいたという運河沿いにあるアパートです。**

0743 ラスコリーニコフがよく訪れたという**センナヤ広場**。車輪を活用したベンチがなぜか強いイメージを送り出しています。

0750 センナヤ広場の一角。**テントを広げた果物屋さん**ですね。ここからあいにく小雨が降り出しました

0754 雨の中ラッキーなことにここから地下鉄に乗ることになりました。**駅は地下深くエスカレーターも長さが 100 メートル近くあり**、さらに美術館のように美しくなっています

0757 **ロシアの地下鉄はとても地下が深い**印象を受けました。これは戦時のための守備、

避難にも使えるから、とのガイドの説明でした。今のロシアとウクライナの戦争でも同じ状況が起きていますね。つい先頃、東京都も「万が一、外国から攻撃があったとき地下鉄を避難場所にしたい」との発表が小池都知事からありました。

0758 ここからドストエフスキーが最後に住んでいた家・博物館に入ります。入り口にあるドストエフスキーの彫像です。

0760 ドストエフスキーが使っていたという机。ここで『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』などの作品を次々と書いていったとのこと

0763 『罪と罰』のオリジナル原稿だと言います。

0774 博物館内に掲示されていた当時のサンクトペテルブルクの街の絵ですね

0775 //

0780 街の歩道に立つドストエフスキーの像。何か考え事をしているみたいなポーズですね。

そして物語の終盤。ラスコーリニコフの魂は売春婦ソーニャによって清められていきます。

(ここからまた翻訳文の引用です)

「たんにシラミをつぶしただけじゃないか、ソーニャ、なんの役にも立たない、けがらわしくて有害なシラミをさ」

「だいたい、ぼくはあのばあさんを殺したんだろうか？ ぼくは自分を殺したんだ、ばあさんじゃなかった！ あのと、ぼくはほんとうにひと思いに自分を殺してしまった、永久に・・・あのばあさんを殺したのは悪魔で、ぼくじゃない・・・」

(ソーニャの言葉です)

「・・・いますぐ、いますぐ、十字路に行ってそこに立つの。そこにひざまずいて、あなたが汚した大地にキスをするの。それから、世界中に向かって、四方にお辞儀して、みんなに聞こえるように、『わたしは人殺しです！』って、こう言うの。そうすれば、神さまがもういちどあなたに命を授けてくださる・・・」

「ソーニャを見つめながら彼は、自分に注がれている愛がどれほど大きなものかを感じることができた」。ソーニャのすすめで自首したラスコーリニコフへの罰は、それまでの善行や自首したこと、取り調べの際の態度などを考慮し、シベリア流刑8年というゆるやかな刑になったのです。

舞台となったサンクトペテルブルクはかつて帝政ロシアの首都でした。ソ連時代にはレニングラードと改名され、再びサンクトペテルブルクへ。この間に、政治も社会体制も経済機構さえもすっかり変わってしまいました。でも、大きな石造りの家並みや道路、運河の陰影は歴史の変転に流されることなく今なお残っています。

今、社会における格差が問題視されています。なぜ自分は努力しても報われないのか、社会が不公平なのではないかと悩む人も多い。「罪と罰」は、現代の日本の社会にも通じるものがあるような気がします。「格差がもたらした犯罪」や「矛盾だらけの世の中への怒り」・・・作品が投げかけているテーマは、何世紀たっても変わることのない人間の本性と社会の矛盾をも突いているのではないのでしょうか。

本作は「罪を犯した人間でも更生できる」というテーマをあつかっています。「殺人」というもっとも重い罪を犯した人間でさえ復活できることを描くことで、読者に希望を与えたかったのでしょう。人間回復へのヒューマニズムが描かれた『罪と罰』は、いつの時代にも読者の魂を奥深いところで揺さぶっていくように私には思われるのです。

聞くところによると、特に大学の新生や会社の新入社員が読むように勧められ、これが研修の教材になっていることも多いようですね。

### エルミタージュ美術館

ここで「罪と罰」の作品からは離れますが、サンクトペテルブルクを訪れる人で、エルミタージュ美術館を観光から外す人はいないでしょう。世界三大美術館の一つとして絶対的な評価を誇っています。ネバ川に沿うように長く荘厳に伸びている。カメラマンと二人で訪れました。

入場料は一人 400 ルーブル(当時約 1200 円：ウクライナ侵攻で交換レートが変わってきて今は何円になるのかは分かりません。それに撮影料として 200 ルーブル。フラッシュは許されていませんが、日本の美術書に出ているような作品を自分のカメラで撮影できるのはありがたいことでした。

館内は大変な数の見学者ですが、廊下や展示室の天井も高くゆったりとした造りのおかげでそんなに混雑は感じません。エカテリーナ女帝の“隠れ家”とも言われた宮殿の部屋の天井が金で塗られ、金色をふんだんに使った部屋の華麗さと建物自体の壮観さが人気の秘密ではないかと思ったものです。

0785 エルミタージュ美術館の遠景

0787 美術館への入場を待つ見学者の列

0788 美術館内の入場券売り場

0790 美術館の入り口。さすがに女帝エカテリーナ 2 世の宮殿だっただけあって豪華を極めています

0797 部屋にはシャンデリアも飾られています

0800 美術館の部屋の一面はネバ川に面していて船の航行も覗き見ることができました

0802 休憩室的な部屋。かつてはここで舞踏会なども行われた。映画「戦争と平和」の中でヒロインのナターシャがアンドレイ公爵と踊った時の舞踏会に使われた舞台ともなったとのこと。

0803 ナポレオン軍のロシア侵攻とロシア軍の大戦の模様を描いたものです

0804 戦争はどんな戦争でも悲惨きわまりありませんね。傷つく多くの兵士、やがて一般市民もその戦いの犠牲になっていく。現在のウクライナとロシアの状です

0807 美術館の出口近く。

0808 ネバ川側から見た美術館です

0815 サンクトペテルブルクの街でも最も交通が賑やかなネフスキー通り

0826 観光的にも有名なイサク聖堂です

0834 同行のカメラマンと街を散策していると、こんな光景が目にとまりました。私はカメラを手に現場に駆けつけてみると・・・  
現場ではあちこちで新婚カップルたちの記念撮影が行われていたのです。我々もその撮影班の一員に加わりました

以下、どこに行っても初々しいカップルに出会いカメラも向けてきましたが、文学紀行からそれていくのでこの数枚だけにして、モスクワ、ヤースナヤポリャーナでの写真も含めて最後に“ジュンブライド・イン・ロシア”（ロシアの6月の花嫁）とのタイトルでまとめてご紹介します。

0904 ネバ川にかかる橋。中型船まで橋の下を航行できるようになっています  
0908 この日は午前中は雨でした。昼ころに雨は上がり向こうの空が灰色から 1 時間余りの間に真っ青な6月の空に変わっていききました  
0917 運河の町の一角。周囲の建物も運河と実によくマッチしています。“北のベニス”と言われるのもうなずける思いでした。日の丸のある建物は日本領事館です

#### モスクワへ

0924 サンクトペテルブルクから再びモスクワへ。シェレメティョ国際空港の玄関口。オリンピックの開催を機会にさすがによく整備されていたようです  
0926 宿泊のホテル 11 階の部屋から見たモスクワの夜。12 時ともなるとさすがに白夜の明るさも消え、薄暗い雲間から月が地上を照らしていました

#### ヤースナヤポリャーナ

モスクワでの主要な訪問地はトルストイの『戦争と平和』の舞台でした。着いた翌日、まずトルストイが生まれ育ち『戦争と平和』『アンナカレーニナ』を執筆したトルストイの屋敷博物館へ足を伸ばしました。

モスクワから約 200 キロ南下したヤースナヤポリャーナ。片道 5 車線から 4 車線、そして 2 車線、やがて 1 車線となる比較的整備された道路を、チャーターした 4 人乗りのセダンでひた走りました。カメラマン、ロシア語通訳、私、それにドライバーです。

時速 110 キロを超えるスピード運転。それでも他車がどんどんと追い抜いていきます。道路の両サイドには白樺の林がどこまでも続いていました。その向こうにはまた林や牧草地が広がり緩やかな丘陵が続いている。いかにも映画で見たナポレオン軍が突然、飛び出してきそうな風情さえありました。

3 時間半のドライブで到着した「トルストイの屋敷博物館」は緑に囲まれた広大な敷地の中。白樺の並木、池、花園・・・ここでも、結婚式を挙げてきたばかりの 10 組を超えるカップルが、屋敷内のあちこちで記念撮影をしていました。

0930 広大なトルストイの屋敷の入り口です。ロシア人にしては愛嬌のよい番人が我々を

迎えてくれました

- 0938 門をはいった直後にある小さな池（湖）は静かながら結構大きな広がりを見せています
- 0941 門から屋敷に通ずる白樺並木。日本の白樺より 5 メートルほど背が高いような気がします。新緑が最も美しい時でした
- 0958 世界的文豪トルストイが生まれ育ち、『戦争と平和』をはじめ「アンナカレーニナ」や『復活』などの作品をつむぎ出していった家です。現在は博物館になっていました。中にも入りましたが残念ながら内部の写真撮影は一切許されておらず、ご紹介でき亡いのは残念です
- 0984 生家からトルストイの墓まで 300 メートルほど森の中を歩きました。木漏れ日が初夏を彩っていました  
森の中で芝生と草に覆われた質素なトルストイの墓です。トルストイは生前、「自分が死んだ後の墓はできるだけ質素に」と遺言したそうです。歴史に残る世界的な文豪にしてこのお墓。どこかの成金が自分の威光を示すためにキンキラキンの豪華な墓を作るのとは大きな違いですね
- 0968 トルストイの生家の広場で記念撮影をしているカップル。何人ものカメラマンや照明係に囲まれ楽しい光景が展開されていました。写真は後ほどまとめてご紹介し  
ます。
- 0994 屋敷は高校生や大学生の見学の場にもなっているようでした
- 1001 ゲートの横にあったトルストイの屋敷の図面です。ずいぶん広いのがわかります
- 1004 ヤースナヤポリャーナから戻った翌日の朝、宿泊のホテルから見たモスクワの空。  
青空に遊んでいる白い雲は平和的でのんびりでいいですね

上下 2 巻に及ぶ長編小説にはあらゆる哲学や思想、箴言が含まれていて、とても簡単に論ずることはできません。世界文学の最高峰と言われるほどの名作なのですが、とにかく長いことでも有名ですよ。日本語では 180 万字ほどになるという。「いつか読みたいと思いつつも、いつまでも読めない本、あるいは途中で挫折・・・」の代表的な存在なのではないでしょうか？

物語は 1805 年から 1813 年にかけてのナポレオンのロシア侵略から撤退までのヨーロッパの大動乱の時代が舞台になっています。登場人物の数は 500 人余り。ストーリーが複雑に入りこんでいますが、大きな役割を担っているのは 3 人でしょう。

そのひとりがピエール。貴族の息子。お人好しで不器用。父親の急死により、莫大な遺産を相続します。急に大富豪になってしまったピエールは、何のために自分が生きているのか、その意味がわからずにいる。

もうひとりの主人公はアンドレイという男性。ピエールの数少ない親友で、勇敢な軍人ですが、名誉欲が強いタイプ。自分の名を世界にとどろかすことこそが生きがいだと思っ  
ていましたが、挫折し、目標を見失ってしまう。

このふたりの男が、天真爛漫な少女、ナターシャに恋をします。そして 3 人は、ナポレオンとの戦争に巻き込まれていきますが、それぞれに成長を遂げ、生と死、そして愛の意



味を知ることになっていくのです。

ここでは私がこの長編小説を今挙げた3人を柱に4項目に絞ってみました。

- I. 戦場で倒れたアンドレイが、空を見上げながら人生について思考をめぐらす情景
- II. 13歳で登場するナターシャの瑞々しさと恋に悩む姿。やがて結婚し子だくさんの良妻賢母になっていく経過
- III. ナポレオンのモスクワ侵攻と炎上、そして冬将軍の中での絶望的な退却行
- IV. 小説の各所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」「死とは?」・・・人間社会の根源的な課題への言及

以下、流れに沿って原作から、戦場の描写に絞って一部だけ引用してみますと：集英社版の世界文学全集 第20巻21巻 原久一郎（ひさいちろう）訳

- 食もとらず休息もせず、疲労困憊の極に達した両軍の兵は、同じように、まだ殺し合っていないなければならないのだろうか?という疑念を抱きはじめた。一同の顔は動揺を表し、すべての者の心に『何のために、だれのために、われわれは殺したり殺されたりしなければならないのか?・・・殺したいやつは勝手に殺しに行くがいい、したいことをするがいい、しかし、おれはもうこれ以上ご免だ!』というような懷疑が湧きおこった。

（プーチンによる兵隊の追加募集<というより“徴兵”ですね>されたロシアの今の若者たちもこんな気持ちになっている人も多いのでは、と推測します）

- やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れはてた者やためらっている者の上に、小雨がしとしと降りはじめた。「おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ!やめてくれ・・・いい加減正気に返ったらどうだ!お前たちは一体何をしているのだ?」こう言っているかのようにであった。

（雨に言わせた著者トルストイの強い思いの発露ではないでしょうか）

- ところで、戦争とはいったい何だ?・・・戦争の目的は殺戮だ。軍人社会の習慣とは・・・人間をもっとも多く殺した者がもっとも立派な褒賞にあずかるんだからね。殺戮した敵の数が多ければ多いほど、彼らの功績は甚大だと自負して・・・。

（平常な社会では、人を一人殺せば重大な犯罪になるのに、戦争となると人(敵)を多く殺したほど英雄になる、という矛盾!)

一方で：

- I ただ彼の上には高い空――晴れてこそいないが、高い空と悠々と過ぎゆく灰色の雲があるばかりであった。

「なんという静かな、平和な、崇高なことだろう・・・」

(戦闘で傷つき草地に倒れ空を眺めた時のアンドレイの心の中です。戦争の悲惨と戦場の喧騒に対して、見上げた空のなんと高く悠久なことか。空を見上げているなかで、現実の世界も見下ろせるような境涯にもなっていくことが感じられてきます)

まさに戦争の不条理と人間の心の奥を描いています。私には、現在、ウクライナに侵攻

しているロシア軍が、モスクワ侵攻で壊滅したナポレオン軍のようにも思えてくるのです。プーチンはなぜ自分の国の歴史に学ばなかったのか、と。

## ロシア・ウクライナ戦争終結へ生命尊厳の哲理を

なんとしても早くロシア・ウクライナ二国間の戦争を終結してもらいたい。世界中の政治家や関係者がそのための努力をしています。ここで私はトルストイの『戦争と平和』と合わせて SGI（創価学会インタナショナル）会長、池田大作氏の著作『人間革命』第一巻の冒頭の一節をご紹介します。と思っています。

池田氏はペレストロイカで世界平和への道を切り開いてきたゴルバチョフ元大統領の初訪日の道を切り開いた人です。ゴルバチョフ氏はつい先頃亡くなりましたが何回にもわたる二人の交流は「21 世紀の精神の教訓」との共著で「文明間の対話」として実っています。小説『人間革命』の冒頭は次の言葉で始まっています。

戦争ほど、残酷なものはない。

戦争ほど、悲惨なものはない。

だが、その戦争はまだ、続いていた。

愚かな指導者たちに、率いられた国民もまた、まことに哀れである。

そしてその続編とも言うべき「新・人間革命」の冒頭では：

平和ほど、尊きものはない。

平和ほど、幸福なものはない。

平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない。

両方を合わせて 40 巻あまりになる著作では、人間の生き方から生命論、平和論なども展開されており、まさにトルストイの「戦争と平和」に通ずる大河小説だと私は思っています。

気鋭のジャーナリスト・佐藤優氏は近著「プーチンの野望」の「はじめに」の文の中でこの一節を引用しています。外交官としてモスクワにある日本大使館に約 8 年間勤務、北方領土問題など日本政府要人の通訳も務めてきた氏は、ロシアの歴史から日露の関係などについて分析しながら現今のウクライナ問題について解説し、本の最終部分では、池田大作 SGI 会長とミハイル・ズグロフスキー博士（国立キエフ工科大学総長＝当時）対談の内容に触れながら「平和のための『闘う言論』を」と世界に対話を広げることを強調しています。

「一人の人間における偉大なる人間革命は、やがて一国の宿命転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」との小説のテーマも、平和な世界を築く究極の方途の一つだと私は思います。今の地球を覆っている危機に解決への光を注ぐであろうとの思いから二つの作品をご紹介します。次第です。

### ナポレオン侵攻の跡地に立って

『戦争と平和』の舞台はあちこちに広がっていますが、中心はモスクワとサンクトペテルブルク。後半のクライマックスはナポレオンのモスクワ侵攻と退却です。そんな小説の

流れと史実を押さえながら、翌日はモスクワ市内を散策しました。

まずはモスクワの顔「赤の広場」と「クレムリン」。続いてトルストイ博物館、モスクワ大学、雀が丘、そして最後にモスクワ川クルーズで街の表情をカメラに収めてきました。

- 1007 有名なポリショイ劇場の正面玄関。時間もお金のゆとりもなく残念ながら舞台を鑑賞するチャンスはありませんでした
- 1019 ロシアの中心「赤の広場」に入っていく門。地方からのおのぼりさんとモスクワを訪れた外国人でいつも賑わっています
- 1020 大道芸人が子供たちと一緒にポーズを観光客のカメラの後ろから撮影
- 1025 観光客が買い物に訪れる赤の広場の片面にある Gum 百貨店。モスクワの物価は世界一に近いほど高かったですよ
- 1032 政治権力の中核クレムリン宮殿の建物。ソ連時代にはこの前の「赤の広場」を戦車から大陸間弾道弾まで兵器のパレードがあったものです。皆さんもテレビか新聞報道でよくご覧になったことがあると思います。ちょうど今の北朝鮮みたいだったですよ。つい先日、プーチン下でも同じようなパレードがありましたね。
- 1035 「赤の広場」の一角にあるワシリー寺院。共産主義国家であったソ連も宗教を完全には閉め出さなかった。どんな社会体制にあっても人間にとって宗教のもつ重さ大切さが伝わってきますね
- 1038 「赤の広場」の一角にそびえる時計の塔。歴史の変遷を見つめてきたでしょうね  
<広場のあちこちで記念写真を撮っています>
- 1043 「赤の広場」をできるだけ広く撮った写真です。この広場を戦車やロケットを乗せた車がパレードしたわけです
- 1047 Gum 百貨店を別の角度から眺めた写真です
- 1049 広場の出口にある土産品売り場。毛皮の帽子や、中に同じ形の人形がいくつも入っているマトリョーシカなど、いかにもロシアらしい土産品が並んでいます
- 1054 マトリョーシカ、それに英語の文字の入った野球帽もあり面白いですね
- 1059 アメリカのオバマ大統領がモスクワを訪れた際に泊ったというホテル。赤の広場から 300 メートルほどの距離感でした。今はそんな関係にないのが残念です
- 1065 モスクワ市内にあるトルストイ博物館の入り口にある掲示板
- 1067 博物館の入り口にあるトルストイの胸像。ひげとオレンジ色の激しさが文豪の魂を宿しているようでした
- 1075 トルストイの所持品やオリジナルの原稿 2 枚
- 1091 夫人との写真。立派なあごひげがトルストイの風貌を象徴しています。
- 1096 博物館の中に講演やプレゼンテーションをする場として、いす席も用意されていました
- 1102 『戦争と平和』のオリジナル原稿と校正原稿
- 1104 博物館にはナポレオンを迎え撃つための作戦会議の絵もありました。映画のシーンに似ていましたね
- 1114 トルストイは当時の多くの著名人と交流があった。その時の手紙の数々です

- 1122 多くの作品をたたき出したタイプライター  
1129 博物館の出口にあるトルストイの像。こちらは渋い感じですね  
1132 建物を出るとその前の庭にはトルストイの石像がたっていました。なんとなくメタポ。シェイプアップが必要のような体形ですね

#### モスクワ大学

- 1153 モスクワ大学の本部塔です。学問の象徴とともに私には権威の象徴のようにも思えました  
1154 大学の遠景。手前に立つのは大学の創立者の像です  
1168 正面玄関の前は長方形の池と噴水があって学生たちの憩いの場ともなっているようでした  
1171 大学のすぐ前の道路を挟んで広がるお花畑。学生たちの憩いには役立っているようです

#### <花嫁の写真 1枚>

- 1192 大学から500メートルほど歩くと「雀ガ丘」という高台につきます。  
1196 観光客の集まる場所にはお土産店が集まる。雀ガ丘の広場には100件を超えるお土産屋さんが競うように並んでいました  
1203 雀ガ丘から望んだモスクワの遠景です。ここからはモスクワ市の大部分を望むことができます。モスクワに侵攻したナポレオンもこの丘に立って作戦を練ったといわれます。

#### モスクワ川クルーズ

- 1230 私たちもモスクワ川の観光船に乗りました  
1231 クルーズ船から見たクレムリン宮殿。建物の裏側にあたります。チョコレート色の塔はクレムリン周辺を警備する望楼。ロシア帝国から共産革命、ソ連の台頭、そしてまたロシアへと、政治的変遷のいろんなシーンを見てきたのでしょうか  
1238 ロシアではモスクワ大学に似た建物がよくあります。スターリングゴチック建築というのだそうですが、特徴はできるだけ高く空に伸びようとするのだそうです  
最後に (ロシアを救った海の英雄の像)

<以上ですが、最後にこの文学の旅で出会った新婚カップルの写真をまとめて上映します計20枚です>

ロシア文学の旅では、行く先々で新婚カップルの初々しい場面にぶつかりました。ロシアには「ジューンブライド」の慣習はないといいますが、でも、太陽が輝き緑が最も美しい6月は新生活のスタートに最適なのかもしれません。

約1週間の滞在で出会ったカップルは20組を超えました。白いベールに純白のウェディングドレスの花嫁たちは木々の緑に映えて美しく輝いていました。

彼らは仲間に取り囲まれて記念撮影をしていました。私たちもその“撮影班”に加わったのです。おめでたい席。断わられるようなこともありませんでした。

「シャスリーバ！（お幸せに！）」

同行の通訳から教わったお祝いの言葉を投げかけると、ニコっとほほ笑んで応えてくれる花嫁もいました。

仲間たちが囀（はや）したてます。「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」

「ゴーリカ」とはロシア語で「苦（にが）い」との意味。つまり「苦いからもっと甘いところを見せてくれ！」との呼びかけだといひます。そんな声がかかると、カップルはひと抱き合い熱くながーいキスを何回も繰り返したのです。

周囲は「アジン(1)・ドヴァー(2)・トゥリー(3)！」とその長さをカウント。それを“撮影班”がカメラに収める。私たちもその後列に加わったのです。

少々お堅い文学作品の取材旅に思いがけずも心温まる光景をプレゼントしてくれたのでした。

111 結婚式を終わったばかりに関係者で記念撮影をしているようですね

112 式を挙げた教会をバックに日本で言う仲人と一緒にパチリ

113 さあ、これから二人だけの旅が始まるよー

114 夢心地になって運河に落ちないでね

115 このポーズでいいかしら

116 親戚が集まり新生活に旅立つ二人を祝福

117 ヨイショ！「あなた、私を落とさないでネ！」。花婿は力持ちでなければいけません。

118 「バンザーイ」でいいのかな？仲間の出発を祝ってみんなでハイジャンプ！

119 「もう死ぬまでキミを離さない」と言ったかどうか・・・

120 ここはトルストイの館ですよ！ そんなこと二人の愛には関係ありません。

123 「さあ、大好きなあなたの顔に私の唇からシャボン玉が飛んでいくわよ」

124 「こんな感じでいいかしら？」。カメラで覗くカメラマンのお尻に注意！

126 「早くチューして！」「キミは本当に美しいよ」

127 「あなたに捧げる花束をどうぞ」。モスクワ大学前の森の一角でのシーンです。花婿の純朴さと白い花嫁の美しさが際立っています。以前に昭島市の写真展にも応募した作品です。

128 新婚旅行に行く車もいかにも「新婚ホヤホヤ」な感じに飾られています。

129 モスクワの雀が丘での記念撮影中のカット。新郎（後列左から 3 人目、右隣は花嫁さん）は全盲で花嫁は弱視。祝福する周りの仲間も大部分が視力に問題を持っている人々とのことでした。どんな社会体制にあっても、お互いの理解と支え合いがあればこそ！人生のスタートは同じです。

以上で写真の紹介は終わりますが、平和があってこそ若者たちの恋があり愛があり幸せな人生もある——一刻も早くロシアにもウクライナにも平和が訪れて欲しいと願うものです。

これで、「罪と罰」「戦争と平和」についての私の話を終わらせていただきます。

長時間のご静聴ありがとうございました。